

杉立義一先生を偲んで

奥沢康正

「京都の医学史」出版時編纂委員の中心的な役割を果たされ、今日の京都医学史研究会を育てあげられて来られた阿知波五郎・守屋正・山田重正・宗田一・坂上俊之の諸先生に続き重鎮であった杉立義一先生が鬼籍に入られた。

先生は六十六年前歴史学者奈良本辰也先生から歴史学を学ばれて以降、一九八二年に「京の医史跡探訪」、一九九一年に同増補版、同年「医心方の伝来」いずれも思文閣より出版。二〇〇二年には「お産の歴史——縄文時代より現代まで」を集英社新書より出版され、随筆その他の論文を含めると実に三百五十篇余りとなります。これ等の特別講演等を含めた業績目録は二〇〇四年発行の

「啓廸」第二号に全て掲載されています。

先生は二〇〇一年五月十三日早朝、脳梗塞をおこされましたが、その後回復され余病をかかえながらも再び日本医学史学会総会、京都医学史研究会には必ず出席され、私達は多くの示唆をいただいております。それ以前、先生が御元氣であった頃、台湾で国際東洋医学会総会が開催された時、御夫婦といっしょに私も出席し、台湾の要人との会席、台中高雄日月山への観光と楽しい思い出



がよみがえって来ます。学会場では私も靈芝について演題を提出していましたが、先生はライフワークである「丹波康頼と医心方」について特別講演をされ、これは中国医薬学院吟鴻潛教授により訳され「医心方——日本現存最古医書」と題し、台湾中国医薬学院から出版されました。その後数回、中国医薬学院に招待され、台湾の医史学研究者との交流を深められました。さらに、それ以前には、韓国、米国、ヨーロッパ諸国（オランダ・スコットランド・ドイツ・イタリア・ポロニア・ウイーン・パリ）、中国旅行を重ね多くの医史跡を探訪され、その都度旅行記を京都の医療機関誌や医師会会報に紀行文として投稿されています。先生は私に、いつも口癖の様に歴史は実地の探求が必要であると論されておりましたが、まさに産科の実地医家としてだけでなく、医史学においても見聞に基づき多くの資料を読破し、未発表の資料を自ら発掘し、多大な業績を上げられました。重ねて、これらの業績にとどまることなく山脇東洋と人体解剖、賀川玄悦と産科を軸として、これまた多くの記念事業にもかかわられ、詳しく書き出せば足りないほどの供養碑や記念碑を建立されました。

一昨年廃院を決心された後私に、業績目録をまとめたいと御話された時、私は「先生にはまだまだ執筆してもらわねばなりません。まとめるのはもう少しお待ち下さい」と申し上げつつ、先生が歩んでこられた医史学の研究の跡を私自身もたどってみたい気持ちもあり、先生の論文検索を少しお手伝いしたことも、今は先生の偉大さを偲ぶ思い出となっています。日医最高優功賞を受賞され、お祝にかけつけた時、また、「お産の歴史」を脱稿され、出版のはこびとなり、新聞に大きく報道された時の先生の何ともいえない満足感のお顔も睨めれば浮んで来ます。

先生が今迄お集めになられました膨大かつ大変貴重な史料が散逸しない様に願うばかりですが、御遺族の御負担も大変であるとお察ししております。幸いにも、お嬢様の御主人が杉立先生の御自宅の前で足立医院として立派に開業されており、現在徐々に蔵書目録を作成するための整理を始められたと聞き及んでおります。私は、

今、先生が私に残された最後の責務と考え、しかるべき所蔵先があれば御子息の足立晴彦先生への仲介の労をとらせていただきたいと思っております。先生のこよなく愛された所蔵の多くが、しかるべき所へ収められるまで、どうか私をじつと見つめていただき、今後も京都医学史研究会、日本医史学会の発展を見守っていて下さい。

台掌